

ソクラテスの知識概念

「何であるか」という問い

大草 輝政

知者を自負する対話相手が、問答を経てアポリアーに逢着する場合、ソクラテスは、対話の手続きに、知識概念の捉え直しを介在させているように思われる。以下では、『エウテュプロン』『メノン』を主要な手がかりとし、ソクラテスの求める知識の射程を考察する。

単一の相の探求

ソクラテスはエウテュプロンに言う。

それでは覚えているかね。ぼくが君に要求していたのは、多くの敬虔なことのうちのどれか一つ二つを教えてくれることではなくて、およそ敬虔なることのすべてが、それによって敬虔である（ ϕ πάντα τὰ ὅσια ὅσιά ἐστιν）ことになる、かの相そのものを（ ϵ κείνο αὐτὸ τὸ εἶδος）教えてほしいということだったのを。だって、たしか君は、不敬虔なことが不敬虔であるのも、敬虔なことが敬虔であるのも、単一の相によって（ $\mu\acute{\iota}\alpha$ ιδέα）であると主張していたのだからね。それとも思い出さないかね。...その相それ自体（ α ὐτὴν τὴν ιδεάν）がいったい何であるかをぼくに教えてくれたまえ。ぼくがそれを見据え（ ϵ ἰς ἐκείνην ἀποβλέπων）それを基準として用いることによって（ χ ρώμενος αὐτῇ παραδείγματι）君なり他の誰かなりのする行為のうちで、それと同様のもの（ τ οιοῦτον）は敬虔であるとし、それと同様でないもの（ $\mu\eta$ τοιοῦτον）は敬虔でないと明言することができるようにね。（*Euthphr.* 6d9-e7）

もともとソクラテスは、「敬虔とは何であるか」と問いかけている

(cf. *Euthphr.* 5d2, 5d7, 6d2)。それは、単一の相（イデア・エイドス）の要求（*Euthphr.* 5d4, μίαν τινὰ ἰδέαν）であると言ひ換えられている。これに対し、エウテュプロンの応答は「現在私がしていること」というものであるが、その回答が不適切であることを、上記引用は告げている。

エウテュプロンの回答には、(1) 事例のいくつかを答えようとしていること、(2) 原因を答えていないこと、(3) 判別基準を提示していないこと、といった問題点が含まれる。単一の相を答えるとき、それらは解消されるであろう。それがソクラテスの見通しである。

すべての事例の原因であり、また判別基準でもあるとされる単一の相の要求は、そもそも正当なものだろうか。その点に関して、P. T. Geach は疑念を表明している¹⁾。彼は、ソクラテスの抱く想定を次のように定式化する²⁾。

(A) もし、ある用語 “T” を正しく述定していると知っているのならば、事物が T であるための一般的基準を示すことができるという意味で、「T であるとは何であるかを知っている」でなければならない。

したがって、

(B) T である事物の事例を示すことによって、「T」の意味に到達しようとしてもむだである。

(B) は (A) からの帰結であるとし、Geach は、この二つの想定を「ソクラテスの誤り (*Socratic fallacy*)」と裁定する。「～とは何であるか」というソクラテスの問いは、対話篇を横断し、随所に見られる³⁾。慣例にならぬ、ソクラテスのその問いを、定義の問いと言い直すなら⁴⁾、上記想定 of 誤謬性について、Geach は、次の事実に訴えていることになる。すなわち、現に、なにか知っていると言ふ場合、われわれはそこに含まれる用語を定義できないままに、たくさんを知っているではないか、と⁵⁾。

ところが、事例は、対話進行において重要な役割を果たしている。それは、対話相手がソクラテスの問いの意図をうまく咀嚼できない場合、

あるいは回答としての定義の妥当性を吟味する場合に顕著である。例えば、ソクラテスは、自ら事例を用いて、問いの射程を説明しようと試みる⁶⁾。「戦列に踏みとどまって敵を防ぎ、逃げようとしていない人があれば、それは勇気のある人だ」とするラケスに対し、ソクラテスは、逃げながら戦う人も勇気があること、あるいは、病や貧乏に対して、苦痛や恐怖に対して、また欲望や快樂に対して立派に戦う人も勇気あることに注意を促す（*La.* 191a-d⁷⁾）。よって、ソクラテスにおいて問題となるのは、事例の使用でなく、その身分である⁸⁾。

『エウテュプロン』においても事例使用は許可されていると考えられる。「敬虔とは何であるか」を知るならば、特定の行為が敬虔であるか否かを明言できる、という推論は、「何であるか」の知識が、Geachの指摘するような必要条件ではなく、事例明言のための十分条件であることを表すものであり、また「すべての敬虔なこと」「君なり他の誰かなり」の行為の判別といった、任意性の強調も、その十分条件としての力点を示唆する。さらに、この発端となった問題は、エウテュプロンが父親を起訴する　それも、ある召使いを泥酔の上で殺害した日雇人の処置を決める間、エウテュプロンの父がその日雇人を放置することによって起こった、殺人のかどで　のは不敬虔であるかどうか、という、きわめて煩瑣な事例の判別に関わる。このように見るならば、ソクラテスが求める「何であるか」の知識とは、意見が対立し、判別困難な事例まで正確な判定に導くような知であり、それは、「ソクラテスの誤り」に描かれるような事例判別のための必要条件としての知ではないと結論されうる⁹⁾。

ただし、もともとエウテュプロンが自認しているのは、敬虔と不敬虔にまつわる、そうしたいっさいのことの正確な知識（5a1-2, τὰ τοιαῦτα πάντα ἀκριβῶς εἰδεῖν）であり、その力点はあくまで、諸事例の知識に向けられている（cf. 6d6-8）。ところが、ソクラテスの要請は、あくまで単一の相に向けられる（5d4, μίαν τιὰν ἰδέαν, 5d7, τί φησ εἶναι τὸ ὄσιον καὶ τί τὸ ἀνόσιον）。このような二人のずれを穴埋めするには次のように考えることもできるだろう。すなわち、一定の仕方では「敬虔なること（τὰ ὄσια）」を知っているならば、「敬虔（τὸ ὄσιον）の何であるか」を知っているとソクラテスは想定している。そして、またエウテュプロンも、そのことに同意する限りで（5d6, Πάντως δῆπου,

ὁ Σώκρατες)、二人の間では、「何であるか」の知識が必要条件として機能している、と。

単一の相の必要性

『メノン』では、ことの「何であるか」の知が、必要条件として、端的な仕方でも要請される。

というのも、あるひとつのものが何であるかを知らないとしたら、それがどのようなものかということ、どうしてぼくは知ることができるだろう。(*Men.* 71b)

このソクラテスの見解は、探求の対象が、敬虔、勇気、美、友、その他いかなるものに及んでも、同様の原理が働きうることを示す。正義について、『国家』第一巻は、彼の次の言葉で結ばれる。

こうして、討論の結果ぼくがいま得たものとは言え、何も知っていないということだけだ。それもそのはず、正義それ自体がそもそも何であるかがわかっていなければ、それが徳の一種であるかないかとか、それを持っている人が幸福であるかないかとかいったことは、とうていわかりっこないだろうからね。(*R.* I 354c)

Fine に従って、この論点を以下の三通りに定式化することができる¹⁰⁾。

- (a) もし、X が何なのかまったく考えを持たない X についていかなる信念も持たない なら、X についてなにも言うことが (言おうとすることが) できない。
- (b) もし、X の定義をまったく知らないなら、X についてなにも言うことが (言おうとすることが) できない。
- (c) もし、X の定義をまったく知らないなら、X についてなにも知ることができない。

ソクラテスに帰されることの多いこれらの見解は、しばしば混同されがちであるが、いずれも含意を異にしており、Fine 自身は (c) のみをソクラテスの主張として析出する。(a) は、それ自体としてはもっともに見えるものの、X に徳を代入してみた場合、徳ついてメノンを自信ある仕方で吟味していくソクラテスにうまくあてはまらず、(b) もその後件は、ソクラテスにそぐわない。結論的には、(a) や (b) は、徳の「何であるか」の知を否認しながらも、徳についてさまざまに思いなし語りうるソクラテス自身によって拒否されると言えるだろう。

(a)(b)(c) の比較検討によって、Fine の分析にはある力点が浮かび上がっている。つまり、知と思わくを峻別している点である。とりわけその論点は『メノン』80d にあらわれるメノンの疑義 「いったいあなたは、それが何であるかがあなたにまったくわかっていないとしたら、どうやってそれを探求するおつもりですか？」 に明快な解決を与えている。すなわち (c) は、たとえ、ソクラテスが、徳について何も知識を持たないことになるとしても、彼が徳について思いなしたり議論したりすることをなんら阻害しない。Irwin も、この意味での定義優先原則を、初期対話篇全般のソクラテスに帰す¹¹⁾。この原則とともに、ソクラテスの無知の立場を重視するならば、彼の知の表明は皆無になると予想される¹²⁾。

しかし、知識と思わくの異質性に立脚したこうした解釈は、ソクラテスの知識の表明箇所と抵触する可能性を争点として迎え入れる。時に、ソクラテスはさして重大でないといわれる知識、あるいは皆が持ちうる知識を提示し (*Euthd.* 293b-c, *Ion* 532d-e etc.) また探求途上にあると思われる定義に密接に関わる知識を表明するよう見える (*Ap.* 29b, 37b, *Euthd.* 296e-297a etc.)³⁾。これらの典拠に配慮するとき次のように問われうる。知識と思わくの峻別とは、中期対話篇に描かれる認識論の逆照射ではないか、と。たしかに、比較的初期の対話篇においては、知識と思わくの対立関係が、必ずしも理論化された形で提示されるわけではない¹⁴⁾。

ただし、プラトンが常に知識と思わくの区別に配慮していることに対しては、ある確かな形跡を挙げることができる。すなわちそれは「知らないのに知っていると思いきむ無学無知」というあり方への変わらぬ警戒の視点である。「知っていること」と「知っていると思いきむこと」

の厳格な区別は、対話篇を問わず繰り返される¹⁵⁾。その一貫したモチーフのもとで、なおソクラテスが知の表明をおこなうとすれば、その知識に、かえって軽減不可能な力点が与えられることになるだろう¹⁶⁾。

Kraut も認めるように、『弁明』においては、29b で、ソクラテスは確信に満ちかつ慎重に知を主張している¹⁷⁾。しかしその一方で、プラトンのソクラテス描写が、対話篇によって、一定の連続性を保ちつつ変化を遂げるとしても不思議ではない。つまり対話篇として、概して最初期に配置される『弁明』と、それぞれ中期付近に配置される『国家』第一巻や『メノン』¹⁸⁾との間には、このような内容的相違があるのではないか。Kraut は、定義優先の原則の有無によって、プラトンのソクラテス的、あるいは中期的／初期的という違いを見るいわば発展的解釈に立つ¹⁹⁾。

『メノン』における知の表明可能性

このような発展的解釈によれば、少なくとも『メノン』では、ソクラテスによる知の表明可能性は排除されていることになる。以下では、その解釈に疑義を呈する典拠の候補を瞥見してみたい。

けれども、正しい思わくと知識とは別のものだということ自体は、決して単なる推量ではないつもりだ。いや、もしもこのぼくに、自分が知っていると言えようようなことが何かあるとしたら そんなものはわずかしかないだろうが、とにかくこのこともまた、ぼくは知っていることのひとつに数えるだろう。(*Men.* 98b1-5)

ソクラテスによるこの慎重な表現は、「あるとしてもわずかであろう知」を、あえて提示している局面と考えることができる。少なくとも、ソクラテスが、知を持ちうるということ自体は、上記テキストによってなんら損なわれていない²⁰⁾。さらに、間接的にはあるが、以下は、ソクラテスが一定の知を保持していることを示唆している。彼は、メノンに言う。

そして問答法においては、ただ単に真なる答をするだけではなく、

質問者が知っていると同もって認めるような事柄を使って答えるのが、おそらく約束によりかなったやり方というべきだろう。
 (*Men.* 75d²¹⁾)

また、幾何学の誤答をしていた子どもが、エレンコスを受けて正答に至る局面では、ソクラテスは、探求の未了を指摘しながらも、想起の可能性、つまりそれはその子自身が自分で自分のなかに知識を再把握していることを示すものであると説明して、次のように述べる。

その場合、この子がいま持っている知識というのは、以前にいつか得たものであるか、もしくは常に持ちつづけていたものであるか、このどちらかなのではないだろうか？ (*Men.* 85d)

もしこれを字義通り、いま子どもが知識を持っていると受け取ることができるなら、エレンコスにおける探求途上において、いっさいの現在の知を排除する対処もまた困難であると言わなければならない²²⁾。Fine が見ているように、そもそも『メノン』71bの含意として、ソクラテスが知識と思わくの間の相違について明晰な態度をとっており、そこから生じる制約　この世での徳の探求過程においては、知は放棄され、あくまで思わくのみが帰されうる　をソクラテスが自らに課しているとするなら、これら現行の知の局面を示唆する言明は、それぞれなんらかの仕方では値引きされざるを得ない。

単一の相が問われる文脈

多くの論者たちは、定義優先原則と呼ぶものを、少なくともいわずれか特定の対話篇で、一般化された原則として認めている。しかしながら、プラトンの思想に発展を見る解釈、知と思わくの峻別を導入する解釈の他に、いまひとつの対処の可能性が残されていよう。それは、定義優先原則そのものの捉え直しである²³⁾。あらためて、「何であるか」の知がどのような文脈で要請されていたかを見ることにしたい。『エウテュブロン』においては、ソクラテスはこう問い質している。

しかしそれなら君の方は、ゼウスにかけて聞くが、エウテュプロン、神々の法について、また敬虔なことや不敬虔なことについて、それらがどうあるものか（ὁππῆ ἔχει）をそんなにも正確に知っていると思っているわけか？（*Euthphr.* 4e4-6）

エウテュプロンの知恵がいかにあるか先まで進んでいると予想されるかは、「いったい何が、ものごとの正しいあり方であるのか（ὁππῆ ποτὲ ὀρθῶς ἔχει）」を知り損ねている多くの人々のあり方との対比において示されている（4a11-12）。エウテュプロンの確信は、訴訟を起こすことで、ひょっとしたら反対に彼の方が不敬虔な行為をしていることになるのではないかと恐れることもないほど（4e）であり、ソクラテスに、恐れや恥とは無縁であるとの印象を与える彼は、自らも、そうしたことをすべてを正確に知っているはずであることを請け合う（5a1-2, cf. 15d）。

これらによって、ソクラテスは、エウテュプロンを知者と想定した質問を投げかける。この場合に求められる知識は、あらゆる敬虔な行為において自己同一である〈敬虔〉であり（5d1-5）、すべての敬虔の原因である単一の相そのものに収斂する²⁴⁾。その相に注目し、それを基準として用いることによれば、例えば、メレトスらがソクラテスに対して起こした公訴の事例なども含め、さまざまな諸事例が敬虔であるか否か、正しく判別することが可能となる。エウテュプロンによるソクラテスへの第一の応答「現在私が行っていること」は、この意味で、ソクラテスが要求する類の知識からかけ離れている。つまり、エウテュプロンの提示しようとする知識は他の局面への応用がきかず、個々の敬虔なこと不敬虔なことについて、その原因まで含めた理解の深まりを与えない²⁵⁾。

ソクラテスの関心は、いかにしてそうであるのかということに説明を与えるような知識であり、それは、例えば、異論の余地が生じる状況において、なお確たる判定を下すことのできる知者、助言者に要請される知識であるだろう²⁶⁾。またそのような包括的な知が要請される局面では、「何であるか」の知識は必要条件としても問われているのではないが、『メノン』では次のように説明される。

たとえその数が多く、いろいろの種類のものがあるとしても、それらの徳はすべて、あるひとつの同じ相を持っているはずであって、

それがあるからこそ、いずれも徳であるということになるのだ。この相を見据えることによって、まさに徳であるところのものを質問者に対して明らかにするのが、答え手としての正しいやり方というべきだろう。（*Men.* 72c6-d1）

つまり、例えば「徳は教えられるか」という質問に対して、答え手は、徳の「何であるか」に触れなければ、質問者を、十分にまた正当に説得することはできない²⁷⁾。問答の局面では、原因・根拠に言及しない限り、異論の余地は、本質的に解消されないからである。

以上によれば、「何であるか」の知識は、Geachの言うように事例判別の必要条件ではなく、むしろ十分条件であること、また知者の資格を得るための必要条件であることが結論され得るだろう。エウテュプロンの第一答は、彼自身の行為が敬虔であると認めるかどうかをソクラテスに一方的に迫るものであるのに対し、他方、ソクラテスの単一の相の要求は、できるだけ遠くに厳格な知を設定することにより、たとえ対話を構成する二人が行き詰まりがちになるとしても（cf. *Euthphr.* 11b-e）かえって、幾度もその同じ問いへと立ち返りつつ（*Euthphr.* 9c5, 11b2, 4-5, 15c11-12）ひとつの問題について、いつの間にか二人が共同して、多角的に吟味することを可能にするような探求の余地を与えている。

ソクラテスの探求において対話が成立し、また一定の事例の意義が失われず、さらに、その中で、判別基準の探求に倦むこともない可能性が開かれるのは、こうしたソクラテスの知識概念との関わりにおいてであるように思われる。

註

- 1) Geach pp. 370-372.
- 2) Geach pp. 370-372.
- 3) *Chrm.* 176a6-b1, *La.* 190b8-c2, *Prt.* 361c2-6, *R.* 354c1-3, *Ly.* 223b, *Hp. Ma.* 304d5-e3, *Men.* 71b1-3 etc. Cf. Benson [2000] p. 114 n. 10.
- 4) 対話篇に描かれるのは、「何であるか（τί ἐστίν）」というソクラテスの問いであって、それを「定義」の問いとパラフレーズするのは、アリストテレスの ὁρισμός 以来の伝統と言える（ただし、プラトンにおいて、ὄρος という言葉は用いられている。Cf. *R.* I 331d2）。「定義」また 'definition' という言葉の難はしばしば指摘される。ソクラテスの意図が辞書的定義

や話の意味ということにあるのではない、などが、多くの論者は、一定の断り書きとともに、なお慣例的に用いている (Beverluis [1974] p. 332 n. 5, Fine[1992] pp. 202-203, Irwin[1995] pp. 25-27, Kahn pp. 171-172, 178, Kraut p. 209 n. 38)。以下でも、「何であるか」というソクラテスの問いに対応するものとして、さしあたりは区別をもうけず、「定義」という言葉を使用する。

- 5) Geach p. 371.
- 6) *Euthphr.* 9e4 sqq., *Men.* 72d2 sqq., 73c9 sqq., 74a11 sqq., *Hp. Ma.* 287e5 sqq. etc.
- 7) この箇所の勇気の事例の拡大は、しばしば、‘co-extensivity’ の要請といわれる (cf. Kahn p. 172, Benson [2000] p. 108 n. 35)。
- 8) Cf. Burnyeat [1977] p. 384.
- 9) Cf. Santas [1972] p. 136, [1979] p. 116, Kraut [1984] p. 209 n. 38, Vlastos [1985] p. 23 n. 54, [1990] p. 7, Beverluis [1987], Kahn pp. 157, 181-182, Benson [2000] pp. 144-147.
- 10) Fine [1992].
- 11) Irwin は、ソクラテスに一切の知を放棄させる代わりに、ソクラテスによって強く支持される命題(「いかなる徳も、常に、美しい (καλόν) 善い (ἀγαθόν) 有益である (ὠφέλιμον)」など)については、「真なる思わく」を帰す。Cf. Irwin[1977] p. 39 “Socratic principles”, “Agreed principles”, [1995] p. 48 “Guiding principles”.
- 12) 知と思わくの峻別により、「ソクラテスの誤り」も、次のように見直すことができる (cf. Santas [1979] pp. 311-312 n. 26)。
 - (1) 敬虔の定義知は、特定の行為が敬虔であると判断したり信じるための必要条件である。
 - (2) 敬虔の定義知は、特定の行為が敬虔であると知るための必要条件である。このとき、(1) は Geach がソクラテスに帰す想定 (A) に連なるけれども、ソクラテスが抱く想定は、むしろ (2) である、と。(2) は、ソクラテスの思わくによる事例使用を可能にする。ただし、ソクラテスが (2) を抱いていたことは、Santas も認めるように、『リュシス』と『ヒippias (大)』のテキストから必ずしも決定的な結論として導かれない。また、Kahn は、『ヒippias (大)』だけが「ソクラテスの誤り」を犯すことから免れることができないとして、このことを、『ヒippias (大)』が偽作であると推定する根拠のひとつに数える (cf. Kahn p.182)。その他、Beverluis、Vlastos は、これらの対話篇を ‘post-elenctic’ な対話篇として扱う (Beverluis [1987] pp. 218, 221 n. 4, Vlastos [1990] pp. 3, 14 n. 11)。
- 13) さらに、その他、特定の技術をおさめた人びとに、一定の知が帰される

- (cf. *Ap.* 22c-e, *Grg.* 511e-512b)。ソクラテスの知識の提示箇所を検討は、Vlastos [1985] の他、cf. Leshner pp. 280, 285 n. 13, Beversluis [1987] pp. 219-221, Brickhouse & Smith [1994] pp. 36-37, [2000] pp. 101-113, Benson [2000] pp. 222-238 etc.
- 14) Beversluis [1987] と Vlastos [1990] は、「ソクラテスの誤り」が、実際には「ソクラテス的」ではないとする。Cf. 註 17, 18, 19. なお、中期対話篇以前において両者が対置されるのは、かろうじて『ゴルギアス』454b3-e9、また、知と正しい思わくの区別が説かれる『メノン』97a6-98c3 など。
- 15) *Ap.* 29a-e, *Alc.* I. 117d-118b, *Chrm.* 166d1-2, 167a4-5, *Men.* 84a-c, *Smp.* 204a, *Phdr.* 275b, *Tht.* 210c, *Sph.* 229c, *Plt.* 302a-b, *Phlb.* 48c-49a, *Lg.* 732a-b, 863c etc.
- 16) とくに、*Ap.* 29a-e。多くの人が抱く死の恐怖とは、知らないことを知っていると思ひこむことに由来するとの確認を経た上で、それとの対比で、ソクラテスの 29b の知 不正をなすということ、神でも、人でも、自分よりすぐれている者があるのに、これに服従しないことが悪であり醜である は提示されている。
- 17) 註 16 参照。Kraut は、『弁明』においては、この他にも、ソクラテスにいくつかの徳や善について一定の知を認める (cf. Kraut pp. 273)。なお、Irwin [1977] では、『弁明』29b の知を単に例外的としている。Irwin [1995] では、『弁明』29b の解釈にあたって、次の選択肢が考えられている。すなわち、ソクラテスは定義の優先を受け入れてはいない。ソクラテスは整合的でない。これは知の主張を述べているのではない。Irwin は をとり、ソクラテスに知の主張はないという方向を示す (pp. 28-29)。知の表明箇所而言及する Irwin の見解の軌跡とその微妙な相違について、cf. Fine [1996] pp. 234-235 n. 6。
- 18) この他、Kraut は『ゴルギアス』(508e6-509a7) を指摘し、Irwin がソクラテスに帰していたものとほぼ同様の原則を認めている。Kraut pp. 275-279 (i) If someone knows the correct definition of X, he is in the best possible position for making true claims about X. (ii) No one is entitled to claim any knowledge about X unless he is in the best possible position for making such claims. 『弁明』のソクラテスは、(i) を持つが (ii) を持たないとされ、『メノン』、『国家』第一巻、『ゴルギアス』のソクラテスは、(ii) を持つとされる (cf. Kraut [1984] p. 213 n. 45)。
- 19) Kraut [1984] pp. 276-277. Cf. Vlastos [1985a] p.26 n. 65.
- 20) Fine は、しかし、ソクラテスの「知の主張」部分への言及を仮定法で表して、それがソクラテスに知を負わせるものでないことを示しつつ、かつ、このテキストが知と真なる思わくの区別を確信をもって提示しているとし、知と思わくの峻別を重視する Fine の立場を、支持する典拠であると

している (cf. Fine [1992] pp. 215, 226 n. 43)。なお、Fine は、想起説とエレンコスが二者択一的な関係にあるのではなく、エレンコスの力を説明するものとして想起説を捉えているが、この限りでは、私は異論を持たない。拙論 p. 57 n. 22 参照。

- 21) 75d6-7 は、προομολογῆ, ἐρωτῶν を読む。
- 22) この点について、Scott p. 16 n. 4。Fine は、エレンコスにおける探求過程、あるいは想起の過程での、この世における現在の知の成立をことごとく排除しようとする (cf. Fine [1992] pp. 223-224 n. 40)。しかし「いま」の知に言及している『メノン』85d9 は、Fine の読みに異を唱えうる。
- 23) この方向をすでに示すのは Nehamas [1986] である。すなわち、なんらかの形で定義の優先が求められる『エウテュプロン』6e3-6、『ヒッピアス (大)』286c5-d2、304d5-e3、『ラケス』190b8-c2、『リュシス』212a4-6、223b4-8、『プロタゴラス』361c2-6、『国家』354b-c、『メノン』71b1-8、100b4-6 といった箇所の検討によれば、それらはすべて、文脈上、単に自然に要求されるものばかりである。それぞれの文脈を離れて定義知優先を原則化する必要はなく、よって、定義を知らなければ、それがどのようなものであるか何も知ることができないというのは、いわば仮構の一般原則であるということになるだろう (cf. Brickhouse & Smith [1989] p. 102)。
- 24) 事例に、例外は想定されていない。よって、定義は、それが事例に適用される範囲が広すぎることも狭すぎることも許されない。Cf. 註 7。
- 25) ソクラテスの関心がその点にあることについては、cf. *Chrm.* 166d4-6, ὀπιῆ ἔχει, *Euthd.* 278b5, τὰ πράγματα ... πῆ ἔχει, *Grg.* 508e6-509a5, ὀπως ἔχει, *Men.* 84b10, ὀπιῆ ἔχει, *Cra.* 420b5, ὀπιῆ ἔχει τὰ πράγματα etc. なお、Brickhouse & Smith は、こうした着眼から、'know how (know why)' と 'know that' の区別を導いている (cf. Brickhouse & Smith [1994] pp. 38-45)。いかにしてそうであるのかに説明を与えるような知識に、ソクラテスの関心があるということに私も同意する。ただし、それは、必ずしも「知識」という用語そのものの二重化の操作 (cf. Vlastos [1985]) を要しないと思われる。「知る」とは、なんらかのことを知ることであり、その主張や否認は、問われている知識の内容に依存すると考えられる。
- 26) *La.* 194a4, cf. Brickhouse & Smith [1994] pp. 49-51。
- 27) よって、「メノンが美しいか」について異論の余地が生じていれば、「メノンとは何ものであるか」に触れることが、正当な答え方であるような文脈が存在する。この点の分析は、Nehamas [1986] pp. 284 sqq. 参照。

文献

Allen, R. E. [1970]. *Plato's 'Euthyphro' and the Earlier Theory of Forms*. London.

- Benson, H. H. [1990]. "The Priority of Definition and the Socratic Elenchus", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 8, 19-65.
 . [2000]. *Socratic Wisdom*. Oxford.
- Beverluis, J. [1974]. "Socratic Definition", *American Philosophical Quarterly* 11, 331-336.
 . [1987]. "Does Socrates Commit the Socratic Fallacy?", *American Philosophical Quarterly* 24, 211-223.
- Bluck, R. S. [1961]. *Plato's Meno*. Cambridge.
- Brickhouse, T. C. & Smith, N. D. [1989]. *Socrates on Trial*. Princeton.
 . [1994]. *Plato's Socrates*. Oxford.
 . [2000]. *The Philosophy of Socrates*. Colorado.
- Burnet, J. [1924]. *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, and Crito*. Oxford.
- Burnyeat, M. F. [1977]. "Examples in epistemology: Socrates Theaetetus and G. E. Moore", *Philosophy* 52, 381-398.
- Fine, G. [1992]. "Inquiry in the *Meno*" in Kraut, R. ed. [1992]. 200-226.
- Geach, P. T. [1966]. "Plato's *Euthyphro*: An Analysis and Commentary", *Monist* 50, 369-382.
- Irwin, T. [1977]. *Plato's Moral Theory*. Oxford.
 . [1995]. *Plato's Ethics*. Oxford.
- Kahn, Ch. [1996]. *Plato and the Socratic Dialogue*. Cambridge.
- Kraut, R. [1984]. *Socrates and the State*. Princeton.
 . ed. [1992]. *The Cambridge Companion to Plato*. Cambridge.
- Leshner, J. H. [1987]. "Socrates' Disavowal of Knowledge", *Journal of the History of Philosophy* 25, 275-288.
- Nehamas, A. [1985]. "Meno's Paradox and Socrates as a Teacher", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 3, 1-30.
 . [1986]. "Socratic Intellectualism", *Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 2, 275-316.
 . [1998]. *The Art of Living*. Berkeley and Los Angeles, California.
- 大草輝政 [2003]. 「ソクラテスの探求の可能性」『関西哲学年報 アルケー』 11, 48-59.
- Robinson, R. [1953]². *Plato's Earlier Dialectic*. Oxford.
- Santas, G. X. [1972]. "The Socratic Fallacy", *Journal of History of Philosophy* 10, 127-141.
 . [1979]. *Socrates*. London.
- Scott, D. [1995]. *Recollection and Experience*. Cambridge.
- Sharples, R. W. [1985]. *Plato: Meno*. Warminster.

- Vlastos, G. [1985]. "Socrates' Disavowal of Knowledge", *Philosophical Quarterly* 35, 1-31.
- . [1990]. "Is the 'Socratic Fallacy' Socratic?" *Ancient Philosophy* 10. 1-16.
- Woodruff, P. [1990]. "Plato's early theory of knowledge", in Everson, S. ed. *Companions to ancient thought 1 Epistemology*, Cambridge, 60-84.

(ケンブリッジ大学客員研究員)